

論文要旨

学位論文題目 大正期『中央公論』の外来語の語彙・表記研究

氏名 石井久美子

大正期の外来語は、明治期と昭和期をつなぎ、近代外来語史における重要な位置を占めながら、その期間が15年と短いことから改めて取り上げられることは少なかった。そこで、本稿では『中央公論』を資料に、語彙と表記の両面から分析を行った。

第1章「序論」では、研究背景として、大正期には外来語がどのような状況にあったのかをまとめた。大正期は、外来語の研究書が刊行されるようになり、日本で最初の外来語辞典が発行されるなど、増加した外来語が整理された時期だといえる。外来語の表記については、漢字からカタカナに転換した時期であることが指摘されており、大正末期には、官報の告示によってカタカナ表記やその仮名遣が定められている。こうした大正期の外来語の重要性を踏まえ、本稿では、大正期の『中央公論』の外来語の実態を明らかにし、外来語としての受容と定着のあり方を示すことを目的とした。

第2章「先行研究」では、大正期を中心に、表記、語彙、そして語彙の中でも混種語の観点から、これまでに明らかになっていることと、本稿で課題とすべき問題とを明確にした。まず、表記に関しては、漢字表記が衰退し、カタカナ表記が優勢になることが指摘されている。そして、語彙に関しては、明治期から昭和期を概観した、計量的な方法での調査分析が行われている。その結果として、語数の推移はほぼ横ばいで、後半に増加の傾向が見え始めるとされている。混種語に関しては、現代語に関する研究が主であり、大正期を詳細に論じたものは見られなかった。したがって、先行研究では、外来語の使用実態について明らかになっていない部分が多いことから、改めて大正期を取り上げる必要性を論じた。

第3章「研究方法」では、研究対象とした資料の選定理由やその概要、対象とした号、対象とした外来語の範囲などを整理した。これまでに詳細な調査がほとんど行われてこなかった大正時代について、各年1号分に抽出間隔を狭め、先行研究では対象外とされることの多かった固有名詞、アルファベット表記の語、漢字圏の地名、略語、混種語も調査対象に含めた。

第4章「外来語の品詞及び語彙の特徴」では、まず、品詞の観点から分析を行い、名詞が98%を占め、中でも固有名詞が最も多く見られることを指摘した。そして、名詞化した外来語に活用語尾を加えることで、動詞や形容動詞に品詞を変えて用いられていることがわかった。次に、語彙の観点から分析を行ったところ、固有名詞では地域名その他、文化名を中心に幅広い意味で使用されているのに対し、一般名詞では抽象的な語が多く、具体的な語は延べ語数が少ないものの、その意味領域は多岐に亘っていることが明らかになった。初出年が明治期より前の語を含む重層的な蓄積が見られ、量的にも質的にも外来語が豊富であったことがわかった。

第5章「外来語表記の特徴」では、大正期の『中央公論』の外来語には、13種類もの表記形式が見られ、全ての字種を使って音・意味・原語を表していることがわかった。表記の変遷を追うと、先行研究

でいわれてきた漢字表記からカタカナ表記へという変化は、固有名詞にも一般名詞にも見られることが確かめられた。ただし、固有名詞では大正末期になっても漢字表記の割合が高く、一般名詞では大正期を通じてカタカナ表記の比率が高くなっている。漢字表記は統一される方向に向かっており、略称表記はほとんどが漢字表記の地名の一部と対応している。そして、これまでにない試みとして、アルファベットを含む表記を外来語として抽出したところ、句や文、書名、専門用語を中心に、原語を引用するために用いられていることが明らかになった。

第6章「外來語を含む混種語」では、外來語が混種語となることで多用され、日本語化していることがわかった。一般名詞からなる混種語では、外來語が形容詞や名詞と結びつくことで、外來語が意味するものの種類を限定するような新しい語が生まれていた。そして、固有名詞を含む混種語の中には、「カイゼル鬚」のように一般名詞化した語が見られ、そうした例では、混種語に含まれる固有名詞のイメージが固定化していることを明らかにした。さらに、略語を含む混種語を取り上げ、それらは略語であり混種語であるという性質を持っていることから、外來語として、より定着の進んだ形であることを指摘した。

第7章「結論」では、第1章から第6章までを総括し、外來語の受容と定着という観点から論じた。本稿で対象とした大正期の『中央公論』の外來語は、その筆者と読者から、大正期の男性知識人の使用した外來語と位置づけられる。その外国語の受容は、新しい概念や専門用語の音・意味・原語を表すために全ての字種を用いて行われていると述べた。主たる表記はカタカナ表記に移行しながらも、地名を中心とした既存の表記の使用と、簡潔に意味を表すことができるという利点から、漢字表記も依然として行われていたのである。さらに、和語・漢語と結びつき多用され、意味が固定化し、注記がなくとも理解される語となっていることから、日本語としての定着は、混種語と略語としての使用に典型的に見られ、慣用句としての使用にも表れている。

なお、最後に、語史的に前後の時代と比較し、共時的に他ジャンルとの比較を試みることで、本研究を相対化し、外來語研究に貢献していくことの重要性を述べて、今後の課題・展望とした。